

## 【桜の同窓会】

それは春四月、新幹線の中だった。

「案内の八ガキはちゃんと持った。」と私は話しかけた。

「はあ、大丈夫。カバンにいれてきた。」なんとなく気が重いのか、母はため息をつきながら答えた。

大阪から岡山まで、新幹線で一時間足らず。それでも母と二人、こうして故郷、岡山へ行くのは何十年振りのことだろう。八十歳に近くなった母は、三年前に足を痛めて以来、家に閉じこもりがちだった。一日中、イスに座ってテレビを見たり、編み物をして過ごすことが多くなっていた。そんな母の元へ、八ガキが届いた。それはここ数年、ずっと欠席していた同窓会への案内だった。ただし今年は、いつもと違う一行が加えられていた。

「諸事情により、今年が最後の同窓会となります。」

そこには、高齢の母や同級生にとって、毎年参加者が減っていくさだめがあり、元気でも、会場までの道のりを一人で行動することが困難になっている現実があった。

母は八ガキが届いたその日から、少しずつ出席の準備を始めた。天気の良い日は外に出て、少しだけでも歩くようになり、嫌がって飲まなかった持病の薬も、しっかりと飲むようになった。だが母は、大阪からの距離を考えて、一人で行くことに自信が無かったのか、なかなか岡山へ行きたいことを言い出さなかった。見かねた妻のアイデアで、私も仕事で行くという名目で、母を岡山まで連れて行くことになった。

会場に着くと、テーブルのあちこちで、「キャッキョウ」とした笑い声や、娘盛りを思わせる明るい歓声が上がっていた。そして、会場の隅には私と同じように息子や娘らしき人もいて、その誰しもが、日頃見ない、母たちの姿に目を細めていた。そこには、六十年以上の時を越えても色あせない母たちの女学生時代があった。

同窓会は、前を流れる旭川の桜並木に負けないくらいの華やかさの中で閉会となり、これが最後であることを惜しむ声で溢れた。

帰りの電車、母は住所を交換した数枚のメモを眺めていた。

「私も、今日は来て本当によかったわ。住所ももらったけど、みんなは九州や四国の遠くから来てたのよ。今度は今日来ていたお友達と、四国で会う約束なの。」

母は嬉しそうにそう言うと、少し疲れたのか、座席のシートを倒した。

「ところでアンタ、出張の仕事は終わったの。」

嘘がばれ、慌てる私を横目に母は気持ちよさそうに眠りについた。久しぶりの飲んだアルコールのせいかわ、ほんのり桜色に赤くなった母の横顔は、少し若返って見えた。